

三遊亭らん丈 後援会会報

『町田駅頭ピラ配りの記』 三遊亭らん丈

ぼくは昨年の十一月から、生まれ育った町田市森野にほど近い小田急町田駅頭にてピラ配りを始めました。尤も、正しくは逆に、小田急町田駅に近い、森野と書かなくてはならないのですが。

日によって違いはありますが、配る時間はだいたい朝の六時頃から七時半、調子が好ければ八時までといったところです。場所は小田急町田駅からバスセンター上をまたぎ、西友町田店に至る歩道橋上です。

バスセンター上にいるのですから、当然朝のラッシュ時の大量に吐き出されるバスの排気にさらされ、それ以上いると排気ガスのために涼が出てきてしまうので、それ以上ピラ配りをするわけにはいきません。涙を流しながらピラ配りをしていては、悲壮感が強すぎてごなにも

ラを受け取っては下さらないでしょうか。

どうして、落語家がピラ配りを始めたのかはこの会報をこらん頂いている方はご存知のように、去る二月に行われた町田市議会議員選挙にらん丈が立候補したからです。そのために、地盤、看板、カバンの三無い候補者としては、最も有効な告知手段だと思い、少しでもらん丈のことを、町田市の方々に知っていただきたく、駅頭でのピラ配りを始めたのでした。

二千票以上もの御支援をいただきながら、町田市議会議員選挙には落選してしまいました。ピラ配りを通じて初めて知り合った方々には、励ましのお言葉の数々をいただき、あるいは笑顔でピラを受け取っていただき、それがどれだけ励みになったか知れません。

ピラ配りは落選後も選挙に関わりなく今でも、続けています。七月は出来なかつたので、八月二十八日いつもの場所でピラ配りを始めようとしたところ、そこには初めて見る先客がいました。いわゆるホームレスの方々が寝ていたのです。四人いらっしゃったでしょう。そこは公共空間ですから、先に来ている方に優先権があるので、その場所を避け、いつもとは違う場所でピラ配りを始めたのです。

たしかにいまの日本は、あまりに深刻な不況が長く続いたために、都市では至るところにホームレスの方々がいるのは、当然知ってはいました。いやでも目に付きまますから。

その方々が、自分が今までいたところにいるのを見ると、改めて不況を、身を以って実感することになったのです。

バブル経済が弾けて以降の平成不況と呼ばれる、この閉塞感を打破するために、我々は、自分が携わる仕事を真直に勤めなければなら

いは、「ごく当然のこととして、果たして、自らに課せられた仕事のみを勤めていれば、それでこの不況は克服されるのでしょうか。どうもそれだけでは、この不況を長続きさせる手伝いをするつもりがねえせん。」

経済学では、「市場の失敗」という概念があります。念のために申し添えますが、「いちば」の失敗ではありません。「じじょう」の失敗です。つまり、資源配分メカニズムとしての市場機能の持つ欠陥をいいます。市場は決して万能ではないのです。

では、市場が失敗したときにはどうするか。そのときは政府による公的な介入が正当化されます。

政府は、国民全体の経済厚生(＝経済的満足度)を最大にするように行動しています。あるいは、行動すべきであり、そのための指針として経済分析が有効であるというのが、経済政策を議論する際の基本的な立場で、これをケインズがそこで育った地名を冠し、ハーベイ・ロードの立場と言います。

たしかに、キャリアと呼ばれる国家公務員採用 種試験の難関を見事に突破した精鋭によって組織された霞が関中央政府の役人が計画立案した政策がうまく機能している間は、それでなら不都合は生じなかったのです。

ところが、近年のみに期間を限定しても厚生省(当時)のエイズ薬害問題、大蔵省(当時)の過剰接待問題、防衛庁の水増し請求問題など、業界の利益を優先することで、国民全体の経済厚生が損なわれるような政策決定や不祥事が次々と明るみに出て来てしまったのです。これは明らかに「政府の失敗」です。

こうなると、先ほど示したハーベイ・ロードの立場が揺らいできます。すなわち、政府は現実には、公共のためにその社会の経済厚生を最大にするという理想主義的なものではなく、利害の異なる各経済主体の対立を反映して、政府を構成する政党・政治家・官僚などのそれぞれ異なる利益集団の妥協の産物であるという考え方が、ごく自然に出てきます。このような政府では、国民の負託にはとっぴい応えられません。

この平成不況も、そんな政府しか我々は持っていないから続いているのではないのでしょうか。

いくら政府が失敗しても、我々は失敗した官僚を更迭することは出来ません。けれど、政治家や政党には、選挙でいかようにも我々はその意思を示すことが出来るのです。その結果、政権を担う与党を野に下ろし、政治家から議席を難なく剥奪することが出来るのです。ピラを駅頭で配っていて痛切に思っている、それを受け取ってくださる方の少なさは、

たしかにぼくのピラなぞ、読むに値いしないつまらないもので、手にするのでも憚られるのかも知れません。

ならば、他の方のピラは手にしていただきたい。この際、ぼく個人のことはどうでも構いません。

中央政府に課せられた最大の使命は、不況の克服です。それができない政府には退出していただくなくてはなりません。その意思表示をするためにも、是非とも選挙では投票をしていただきたいのです。投票しなければ、なにも始まらないのですから。

『医学立国日本』

三遊亭らん丈

一九八〇年代末までの日本は、「経済一流 政治三流」と言われていた、といっても今の若

者はにわかにはその事実を信じることは出来ないのではないのでしょうか。

たしかに、日本の政治は世界的に見て劣悪ではあるけれど、それを補って余りある経済の活力があり、付け加えるならば、優秀なシンクタンクとしての霞が関官僚群が政治の実質を担い、政治家はお飾りに過ぎなかったから、それでも何とか日本は一流国でいられた、というのが冒頭の掲句の根拠となる言説でした。

つまり、日本のベスト&ブライテスト^{II} 知的エリートは中央官僚を自指し、そのパスポートを手に入れるために東大法学部へ入学する、これが学歴社会日本において、プレミッドの頂点に位置する東大文 の役割でした。

明治政府が薩長土肥以外の門閥から、優秀な人材を広く登庸するシステムとして作った東大はその期待に応え、国立ならではの安価な授業料ゆえ入学生の出身階層を選ぶことなく、他大学に抜きん出て優れた教授陣、国立大学の中でも集中的に予算を配分することによって最高の施設を整えることで、戦前戦後を通じて優秀な人材を常に提供し続けてきたのでした。

その官僚は、各官庁におけるトップである事務次官を勤めるべく、与党である自民党から参議院（稀に衆議院）への立候補を要請され、出身官庁の関連団体の応援のもと、めでたく議席を獲得した暁には、心援してくれた団体

に、議席のある限り奉仕するというのが、日本の政治と官僚の関係の一端でした。

たしかに、日本が先進国へキャッチアップ（追いつく）することが至上命題とされていた段階では、官僚は先進国をモデルとして有効な政策を提示することが出来ていました。

ところが一九八七年、バブル経済が膨らんだとき、日本はついに一人当たりGDP競争で、米国を抜き去り世界一の座へと躍り出、キャッチアップは達成されたのです。

すると困ったことに、政治家はもろもろのこの官僚も、目指すべき日本のブランドデザインを描くことが出来なくなってしまったのです。先行するモデルがあるときには、つまり試験問題があるときには有効な解答を作成できても自ら試験問題を作り、それに解答を与える段になると、それまで延々と試験への解答によってその能力を測られ登庸された官僚には、問題自体をつくる能力に恵まれていた者が、余りに少なかつたのでした。

キャッチアップを果たし、目標を喪失したことによって虚脱感に襲われたことが、二〇世紀末から今世紀にかけての日本の閉塞感を説明できる、最大の理由なのではないでしょうか。日本は一旦は経済力において世界一になったものの、その後バブル経済がはじけたあと、

急速にその自信を失い、いまや急成長を遂げる中国に怯え、偏狭なナショナリズムの萌芽も見られます。そのために日本政府は、その必要のないセーフガード（緊急輸入制限）を暫定発動したのでしょう。

では、これからの日本は何を目指すべきでしょうか。少なくとも従前のように、工業製品の主要生産国という位置付けは、安価で良質な労働力を豊富に有する中国が急進する今日の情勢を考えれば、有り得ない選択でしょう。

他をもって代えがたいオンラインワンを目指すのが、最もまっとうな方法ではないでしょうか。たとえば、世界をリードするデザイナーや音楽家を擁する芸術立国。つまり、川久保玲、山本耀司や小沢征爾を陸続と輩出させるのです。デザインや音楽を楽しむのならば日本人に限る、と世界中に認知させれば好いのです。

あるいは医学立国。病気にかかったら、日本の病院に行つて治してもらおう、と世界中に思わせれば好いのです。そのため、優秀な医学生を世界中から集め、その学生には充実した奨学金を用意し、出身階層に関係なく学べる環境を整えるのです。その学生が、日本で学んだ医学を故国に持ち帰り、患者を治すのですから、これほどの国際親善はないでしょう。また、世界中から病人が集まる日本を攻

撃しようとする国家は、どれほどの非難を浴びることでしょう。つまり、日本は世界中から病人を引き受けるがために、武力を持たなくても他国は一切攻撃しようとしなくなるのです。

素敵なデザインの服がショウウィンドウにあふれ、美しい音が舞い、世界で最も優れた医療がある国、そんな国が実現するならばそこは、この世の楽園といっても好いのではないでしようか。

「どうしまショウ」案内

十月二十日 午後六時半開演

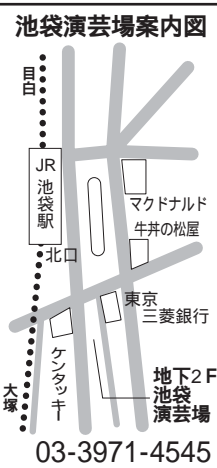
池袋演芸場(下図参照)にて 前売:千八百円

今回のゲストの先生方を、五十音順にご紹介いたします。どの先生も、らん丈が今卒業した立教大学経済学部 टीー チング スタッフ です。まず、「有馬賢治先生」。専門は経営学の花、「マーケティング」です。ぼくは、経済学部編入するまでそんな学問があることすら知りませんでした。たまたま受講した科目でしたが、エキサイティングに進行する授業に追いついていくのがやっとなりました。そのソフトな語り口とは裏腹に、有馬ゼミは経済学部では知らぬ者はいない、厳しさを誇っています。自由国民社の『現代用語の基礎知識』では、今年度からマーケティングの項目を有馬先生が担当なさっています。

菅沼隆先生」の専門は「社会政策論」。今年度から新たに「福祉経済論」も併せて担当なさっています。大学教員は研究、教育、大学運営の三つをその仕事とするのですが、日本の場合どうしても、研究をその中心に据える教員が多いように見受け

られます。その点、菅沼先生の教育にかける情熱は脱帽に値しました。それでいながら、研究と大学運営にも八面六臂のご活躍ぶり。夏休みにもよく大学に来ていた先生とあるときばったりとお会いしたのですが、そのときぼくがたまたまネクタイを締めているのを先生が見て、「立派になって」と声をかけて下さいました。ちなみに、先生はぼくより年下です。

山口義行先生。社会学部の斎藤精一郎教授と並んで、立教の看板教授の一人。どちらの先生もともに「金融論」が専門です。そして、その主張するところは、みなさんご存知の通り、似ているとはいえませんが、このように経済学とは、ひとつの事象を説明するのでも、考え方によってまるで見解を異とすることが間々見受けられます。だから、面白いともいえるのですが、先生の近著『誰のための金融再生か』(ちくま新書)をお読みいただければお分かりになりますが、いまや山口先生は中小企業の味方として一人気を吐いています。



ふるさと町田寄席 一〇〇三年一月十八日

『ホームページ開設のお知らせ』落語会のお知らせや趣味の俳句、大学の授業で発表したレポート、某誌に連載中のエッセイ等を掲載しておりますので、どうぞアクセスしてください。メールマガジンの配信もしています。

http://www.ranjo.jp/

「三遊亭らん丈」後援会入会要項

入会金(会員証作製費+郵送料)として入会者全員から二千円申し受けます。

年会費は四千円ですが、池袋演芸場で行う「どうしまショウ」の入場券(二千円相当)を年間で二枚(四千円相当)差し上げます。

★入会金二千円+年会費三年分一万二千元 一万八〇〇円、合計二万八〇〇円

年会費を三年分前納して下さった方には、10%割引させていただきます。

★入会金二千円+年会費二年分八千元 七六〇〇円、合計九、六〇〇円

年会費を二年分前納して下さった方には、5%割引させていただきます。

★入会金二千円+年会費一年分四千元、合計六、〇〇〇円

会員証と後援会会報のみ御送りします。

振込先口座

郵便振替・口座 00100 1730458

加入者名・三遊亭らん丈後援会

《東京三菱銀行・町田支店》

普通預金・1897690 三遊亭らん丈

《みずほ銀行・町田支店》

普通預金・8046459 三遊亭らん丈

《三井住友銀行・上野支店》

貯蓄預金・7268919 三遊亭らん丈

《UFJ銀行・町田支店》

貯蓄預金・1096152 三遊亭らん丈

【お問い合わせ先】

TEL(042)732 2004 E-mail:machida@ranjo.jp